# 玄遠俳句

平成27年 1月号

## 冬田

早村　春鶴

水ぬけぬ冬田となりし休耕田
耕耘機シートをかぶせ冬田中
碧空を映す冬田の水たまり
日の落ちて樹形黒々寒さあり
底冷の地蔵堂の中鎮もりぬ

## 時雨

一谷　春窓

人力車紅葉時雨を通り過ぐ
カウンター越しの会話や温め酒
盃を交はし鮪に手をのばす
孫に手をひかれゆく径初詣
寒波来てチャンネル探る指の先

## 師走

東　素子

しんしんと師走の街へ歩を早む
衿立てて信号待つ人動かざる
よみがえる雪跳返す竹の音
音立てて車の煽り黄葉散る
残照の雲のパノラマ冬来る

## 冬日

武部　春浦

残り菊自然体にて競いけり
石地蔵笑みに影あり冬日差
星囲む雲を照らして寒の月
空高く影も持たずに刺羽飛ぶ
馬駆けるみぞれの中に時過す

## 冬桜

白原　博泉

咳の子のクラスにひとりふたりかな
病む母のぬくもり胸に寒椿
冬桜歩調緩めて停まりて
色紙絵の赤蕪ふたつころがりぬ
茶の花や墓石にひとり名の増へて

## 紅葉

久保　春玉

よき日和散りし紅葉の東福寺
一人言受け止めくれし蔦紅葉
花八手手毬の白の庭手入れ
有馬富士日暮の中に山ねむる
年の暮白のエプロン買ってみて

## 長野路にて

山本　春英

新幹線冬の紅葉と雲海と
冬霞村なめつくし登りゆく
冬紅葉穂高連山確と見ゆ
冬紅葉天竜川にホテル添う
秋深し手に五平餅妻籠宿

## 冬紅葉

井上　元良

極み色誰しも称讃冬紅葉
ハルカスに時雨の煙り景色消へ
ビル谷間神鈴響く神農さん
頑張と贈られし墨冬ぬくし
師の手元食い入る眼冬の黙

# 玄遠俳句

平成27年 2月号

## 御降（おさがり）　早村　春鶴

御降が吹雪となりて色なくす
朝晴れて午後は御降大荒に
雪国の雪逃れんとして初旅に
二種なれど七種としてきざみをり
米粒をまとひて伸びくる粥柱（かゆばしら）

お降（さがり）＝元旦に降る雨や雪の事
粥柱＝小粥の中のお餅のこと

## 八ヶ岳　一谷　春窓

匙加減ひとりに慣れて晦日蕎麦
雪積むを只ただ見てるのみの降り
故郷の夜明けや雪の八ヶ岳
頂きに淑気ただよふ八ヶ岳
八ヶ岳の淑気に満ちて明けそむる

## 都鳥　東　素子

下町のたゆたう川面都鳥
超高層ビルの洛中みやこどり
遊覧の舟出日和や冬鴎
舟べりをかすめ一飛翔冬鴎

## わが道　武部　春浦

木枯らしや道掃く音の頼り無く
ゆずカボチャ無くて冬至の夜となりし
我が道を繰り返し問ふ大晦日
キラキラとマニキュア姫とお正月
豪奢にも厳かにあり冬夕焼け

## お正月　白原　博泉

秒針の音の刻々去年今年
絶間なく笑ひこぼるゝお正月
くぐりゆく小さき鳥居初詣
パラパラと開かれてゆく初みくじ
声あげて露路に学童独楽あそび

## 初日記　久保　春玉

子も孫もちり鍋つつき去年今年
ガラガラと福引きに夢初詣
初雪や五年日記を書きはじむ
三行と決めて三日や初日記
ポケットにカイロ忍ばせ街に出る

## ニューイヤー　山本　春英

隣人の会釈に御慶返しけり
歌姫のコンサート聴きニューイヤー
童心のジャンケンゲーム新年会
手入れなき小鉢の赤き冬薔薇

## 書きぞめ　井上　元良

ありがたや梵字眼にしむ大根焚
本殿へ押さるるままに初詣
筆始め渾身あふれ墨あふれ
ビル街に初凧堂々背競べ
新年会百歳の檄に和みをり

## 年の暮　佐藤　雲溪

度忘れの重なり老の冬至かな
振りむけば残すものなし年暮るゝ
文鎮に友の思い出賀状書く
寄り添ふて日向ぼっこや庭雀
新年は孫のピアノの発表会

# 玄遠俳句

平成27年 3月号

建国記念の日（紀元節）　早村　春鶴

長き名の命（みこと）の御名紀元節
雲はれて畝傍明るき紀元節
神域に国歌軍歌の紀元節
赤き糸つけたるまゝに針供養
瀬の水に根を洗われて猫柳

初　旅　　一谷　春窓

白妙の富士真向かひに旅はじめ
家中に豆煎る匂い春隣
身をかがめ歩む細道凍ての月
珈琲の香り豊かに寒厨
笹鳴きや受話器に洩るゝ子等の声

雪の立山　　東　素子

遭難か雪の立山夜の更けし
立山は雪輝やかせ堂々と
雪道の壁美しく蘇り
雪の壁陽を撥ね返す登山道
童心にかえる一ト刻（ひとき）雪の原

木枯し　　武部　春浦

テロ世界何という年明け更年期
木枯しや闇深く吹く果てしなく
気晴しは冬毛の猫の肌触り
朝凪や目白に蜜柑やりながら
カーテンの隙間に覗く冬の雲

野蒜摘み　　白原　博泉

梅咲いて目で追ふ川の流れかな
穏やかに母は老ひゆく春浅し
首かしげ寒禽は手の届くほど
西門に鍵かけ仰ぐ春の月
野蒜摘みしふるさと遠し妹忌日

恵方寿司　　久保　春玉

恵方寿司黙って食べる西南西
大筆の炎光りてどんど焼き
孫に託し婿殿にチョコ贈りけり
宿題の臨書手つかず春寒し
春の夜はショパン聴きつつ夢の中

風　花　　山本　春英

しばらくは風花を見て友を待つ
大淀を渡る電車や春近し
老ひとり留守を守りて春炬燵
山茶花の花びら飛ばす風のあり
教わりし母さん料理冬の鍋

初稽古　　井上　元良

お年玉一寸はにかむ幼顔
初稽古凛と走れる緊張感
燃えにもゆ大地煙りて大とんど
寒蜆大粒黒き濃き匂ひ
拍子木の間あい軽やか春歌舞伎

# 玄遠俳句

平成27年 4月号

## 春の水

早村　春鶴

人影に魚影すばやき春の水
植えるもの決まらぬまゝに耕せり
剪定のリズム整ふ空鋏
春霖の止むを待てずに出かけけり
明け方の雨音いつしか春の雪

春霖（しゅんりん）＝いつまでも降り続く春の雨のこと

## 草萌える

一谷　春窓

逆さ字を地に書く孫や土筆（つくし）んぼ
草萌える孫は雀に語りかけ
鉄橋にかかる機関車山動く
空を指す乙女の像や梅かほる
蕗のたう子は散り散りに土手を這う

## 白　梅

東　素子

白梅や母の忌日と舞ひ遊び
それぞれに春蘭りんと咲き誇り
野の道に紫ゆかしすみれ草
たらの芽のふくらみ初めし散歩道
早咲きの河津桜を惜しみけり

## 春の夢

武部　春浦

草萌ゆる小さき土俵を包み込む
母の声聞きしは春の夢なりし
ひき返し風は唸りて春惜しむ
春嵐名残り惜し気に船揺らし
七曲り焼きて先は椿山

## 春の昼

白原　博泉

母の声聴けば会いたし春の昼
西国の空あをあをと梅真白
ひとりゆく春寒の朝歩をのばす
靴底に乾きし春の泥払ふ
浄土への橋に靡くや糸柳

## 春浅し

久保　春玉

駅前ですねる子あやす東風（こち）の中
お水取り終われば春という日和
土の色みどりに変わり草萌ゆる
ドラえもんのポケットより春を出し
老梅やチラチラ雪の降りかかり

## 雛まつり

山本　春英

小児科は満員なりし春の風邪
売店に力士が目立つ春の街
ものの芽の小さな命孫を守（も）る
雛かざり出しそびれたる座敷かな
石割って縁ののぞき下萌ゆる

## 春よ来い

井上　元良

ふっくらと黄金の花芽クロッカス
芽柳のさみどり一分しかと見ゆ
鮎子（しらこ）のぴかぴか光る鋭き眼
春光を部屋に取り込み書を励む
お水取り閼伽（あかい）井の幣の神神し

## 麗らか

辻川　松月

ジャスミンの蕾ふくらむ春の雨
沈丁花鳥呼ぶ丈に育ちたる
送信のメールに白い沈丁花
麗らかや花鉢似たる隣組
庭土はミモザで染まり春陽濃し

# 玄遠俳句

平成27年 5月号

## 花人

早村　春鶴

老夫婦無口のまゝに花人に
ふくらみて色見せはじむ紫木蓮
まだ三分なれど夜桜華やいで
碧空に突き射さりをり紫木蓮
車椅子止めて看護師花人に

## 花の山

小島　小汀

遠目にも花ぼんぼりの風に搖れ
花山の下りの道の楽しけれ
春の空久々に読む虚子全集
夕暮れの小暗き灯花の宿
連山のかすむ大空眺めけり

## 山葵田（わさびだ）

一谷　春窓

白鳥の出迎えくれし船着場
涅槃西風（ねはんにし）にはかに溢る鳥の声
下校児の缶蹴る音や風光る
花屑の散り敷く堤たもとほる
山葵田の流れに写る空模様

## 花吹雪

東　素子

八十路の輪若やぐ花と碧天と
吹く風に花簪の女児（こ）は笑みて
散り積みし花弁艶（あで）やか花の苑
天と地と賞でし大樹の花散らし
花吹雪五風十雨の昨日今日

## さえずり

武部　春浦

さえずりや日本一小さな飛行場
お彼岸や人の溢るゝ縁端に
スーパーの店内放送春の歌
春荒れて声ちぎれ飛ぶ選挙戦
風光る観光バスの連なりし

## 花と人

白原　博泉

病む母の傍に寄り添ひ風車
満開の桜喜ぶすずめかな
自転車のブレーキ音や庭桜
目を凝らし四つ葉探しぬ春日和
久方に叔母の声聴き桜漬

## ブランコ

久保　春玉

風に髪ゆらせて園のブランコに
雑草の中の一・二輪黄水仙
筆頭の先ふくらみて辛夷かな
大人びて孫も中学一年生
鳥の声聴きつゝ眠り春の風邪

## 惜春

山本　春英

終電の若者多し春惜しむ
強き意志母ゆずりなり入学す
あれこれとクラブ選択入学す
推敲の顔と思へず花の下
葉桜や親無き子等の逞（たくま）しく

## 一字書き・研修

井上　元良

初花の一枝料理にお持てなし
初花の感動気分一字書き
昨夜雨に初々しく花ほどけたり
秘仏厨子解きて風入る花の寺
老樹吐く花の精あり色香あり

## 桜前線

辻川　松月

いざ書かん桜前線奈良の上
春風を孕むや筆の軽きこと
水温む薄墨筆にたっぷりと
大書する若き仲間や春の風
乾杯の爪先に墨春の宵

# 玄遠俳句

平成27年 6月号

## 新　樹

早村　春鶴

山深き黒部渓谷五月雨るゝ
大いなる新樹せまりて渓深し
曲り行くトロッコ列車若葉中
雪化粧残せし立山新樹中
渓谷の新樹に染まる列車中

## 五　月

小島　小汀

ほのゆれて中洲花菜畑かな
連山のはるかかなたや五月晴れ
花園の五月の風にはためきぬ
空冴えて月の明るき五月かな
五月雨や夕べの川ににごりあり

## 草むしり

一谷　春窓

世渡りの下手な娘と草むしる
傷負うて土管にしゃがむ恋の猫
頂きに上り詰めたり山桜
風と陽に委ねて初夏のもやひ舟
間を計るごとく蛙の鳴き交はす

## 柿若葉

東　素子

裏おもて光の折れし柿若葉
江戸川の稚アユ遡上を守りける
閘門（こうもん）のボートがくぐり稚子アユも
揚羽蝶（あげはちょう）しばし舞ひをり隠れけり
高塀をどこまで逃げる蔦若葉

## 初　夏

武部　春浦

小雀のスキップリズム塀の上
さえずりや話上手の変調子
連休や犬の散歩の最終日
若葉色して猫の目の穏やかに
春風に瞬きもせず猫の昼

## 蜷（にな）の道

白原　博泉

フリージア花瓶の位置を決めかねて
すみれ咲き改築中の家二軒
蜷の道かすかに残る水の底
小綬鶏（こじゅけい）に呼ばれし如く母は逝く
故里のげんげの中に着陸す

## 母の日

久保　春玉

淡墨不機嫌な日よ花の雨
トランペット子どもの日まだ吹き切れぬ
雨細しそろそろ止むか蜆汁（しじみ）
新茶立て母思ふ日と定めけり
母の忌の近づく木の芽和えつくりけり

## 立山連峰

山本　春英

待望のトロッコ電車初夏の旅
早苗植う立山連峰影うつし
鉄塔は若葉の中や谷深し
はるかなる連峰映（う）つす代田かな
つきまとう立山連峰里若葉

## 若　葉

井上　元良

柿若葉はや花芽持ち勢ひ増す
むくむくと湧き立つ勢ひ樟（くす）若葉
見上ぐれば匂ひ降りくる桐（きり）の花
豆の飯色香の湯気にほほえみて
清々と臨書はかどる若葉風

## トロッコ電車

辻川　松月

雪残る立山連峰黒部展
撥ね上げし若葉の雫トロッコへ
甘酒を売るテントあり山の駅
山蕗の渓（たに）につづきて山の駅
雪渓のなだれて消えし黒部川

## 當麻寺（たいまでら）

山岡　扶佐

よもぎの香満ちて當麻の里静か
春惜しむ當麻の里と二上山
おみくじは引かず當麻の春惜しむ
刎橋（はねばし）は赤く新緑黒部峡
トロッコの登山電車や著莪（しゃが）の花

# 玄遠俳句

平成27年 7月号

## 万緑

早村　春鶴

湾内の島万緑の大いなる
万緑へすはるゝ如く高速道
トンネルをぬけて万緑なほせまる
紫の水に溶けこむ花菖蒲
風中に栗の花あり丹波路（みち）

## 夕端居

一谷　春窓

自由なる暮らしの孤独夕端居
旅支度予報はずれの夏の雨
悪びれず蜘蛛の囲揺らす孫の居て
旅行社は医院の隣梅雨晴れ間
滴りの山を背に負ふ家二軒

## サヨナラ文春画廊

東　素子

墨の香に涼しき画廊文春展
「銀座がない」パリの出店に夏の来る
歩行者天国夏の銀座の風物詩
通い路の神楽坂うら沙羅の咲く
照り晨りして光り合ふ樟若葉

## ミニトマト

武部　春浦

お近づきに家庭菜園ミニトマト
雨降りてあやめ祭の人まばら
うなだれて日下美人の夢いずこ
傷つきて鳩の流るる海光る
軒越してクイーンエリザベス直に咲く

## 草いちご

白原　博泉

降りしきる朝の雨かな草いちご
断ち切れぬ情にほだされ花擬宝珠
奥底に親の教へや仏法僧
母逝きて早や四十九日てまり花
あじさゐや浅瀬に映る藍の色

## 葱坊主

久保　春玉

母の忌や何時もの場所に葱坊主
父の年に近づきしかな額の花
七変化心うつろふ昨日今日
憂鬱（ゆううつ）を押し出して見ん心太
今年こそは捨てる思ひの夏衣

## 燕の子

山本　春英

ほうばる子見ている子ありさくらんぼ
燕の子騒ぐよ烏（からす）ねらうとか
住宅の間（あい）の風あり青嵐
梅雨に入る工事現場の音鈍く
何をする気にもなれずに梅雨の夜

## 植田

井上　元良

鋤き起こす後追ふ鳥や田植どき
掻き終へて静かさひろぐ代田かな
おらの手で苗と語らひ田を植うる
鍬杖に植田見廻る翁かな
ほどほどの雨に艶増す花菖蒲

## 七変化

辻川　松月

青インク被るが如し七変化
暑き日も寒き日もあり梅雨籠り
今年又しもつけの枝束ねけり
一斉に枝を伸ばすや梅雨晴間
一日をぼんやり過ごし梅雨暑し

## 夏風邪

山岡　扶佐

雪残る立山を背に空青し
雪残る逆さ立山代田あり
梅雨の夜や今宵もひとり鳴く蛙
返事して気づく夏風邪梅雨電話
怒鳴られて黙って帰る梅雨寒し

# 玄遠俳句

平成27年 8月号

## 雷雨

早村　春鶴

雷鳴の轟き雨脚強めをり
大夕立来る気配せる風なりし
瀬の水を一気濁らせ雷雨去る
汗ふけどふけどふき出す汗ぬぐふ
前菜はガラスの器夏料理

## 盆踊り

一谷　春窓

おくれ毛に風遊ばせて盆踊り
御嶽の名負へる力士名古屋場所
向日葵や虫も乗ったる峡の駅
レコードの針を落として新茶汲む
孫蹴りし球ころがりて青田中

## 墨書展

東　素子

梅雨空に句読点(くとうてん)打つ吾が墨展
寸暇さき賜る厚情文の月
夏帯の書展に添える粋一途
竹簾窓下に見ゆる墨書展
江戸着物群れて書展に舞ひ咲きし

## 声明(しょうみょう)

武部　春浦

弔いの人固まりて梅雨暗し
五月雨や声明一人音はずれ
青虫や薔薇の花芯に陣をとり
海の昼見に行く夏のトンボかな
抱き帰る借地育ちのトマトかな

## 沙羅の花

白原　博泉

過去帳に母の戒名沙羅の花
小判草風の動きを知らせけり
月見草遠い記憶の中で咲く
ダリア咲き妹と遊んだ山の家
仏法僧失せ物探す事多し

## 梅雨

山本　春英

梅雨らしき梅雨を語りつ孫の守り
老猫の留守番ばかり五月雨るる
梅雨激し荒き声する父子家庭
星空の亡き母はどれ星まつる
長梅雨や客寄せ合戦ビラ合戦

## 明石天文台

井上　元良

子午線に仁王立ちして青嵐
時の日や日時計刻む正確さ
白蓮のあくまでも無垢浄土めく
活鯵の跳ねてこぼるる魚ん棚(うおたな)
師の朱筆もやもや飛ばす梅雨晴間

## はったい粉

山岡　扶佐

朝粥(あさがゆ)や母の好みのはったい粉
梅雨晴間樹々の緑の光りあう
短冊を見上げて子等の星まつる
小さき蝉鳴かずにしばし幹抱いて
初蝉のうたう時間の短くて

## 星まつり

佐藤　雲溪

ふるさとは遠し蛍の青田道
亡き妻は宇宙のいずこ星まつる
短冊(たんざく)は妻への便り星まつる
列島はダブル台風炎天下
真夏日や小犬はしゃぼんにじゃれている

# 玄遠俳句

平成27年 9月号

## 稲光

早村　春鶴

稲光しきりなる夜雨を待つ
稲妻の海へ向ひし自衛艦
蜩の声の止絶へて山暮るゝ
天の川流れ行く先日本海
掃苔のたまにぱらつく山の雨

稲光（いかづちともいふ）は、雷鳴も、雷もなく、天空でスパークしている様子です。

吾子の指

一谷　春窓

別れ告ぐ画廊銀座の夏柳
返り見るみゆき通りや雲の峰
吾子の指も借りて朝顔数へけり
大いなる夫の背偲び墓洗ふ
気だるげな沈黙（しじま）を破る団扇（うちわ）かな

猛暑

東　素子

思考停止猛暑つづきの個展終え
暑気疲れ只文字追うている読書
夫八十路いよいよ寡黙（かもく）蟹を食う
一雨はありしが猛暑おさまらず
壮快な夏の夕焼け父まつる

## 梅雨

武部　春浦

梅雨曇り法事の席の乱れつつ
立ち話喪服の肩の濡れるまま
雨しとどアジサイの花色あせて
七色の紫陽花の夢わが胸に
牛肉を食べろと言われ梅雨長し

燕の子

白原　博泉

豚草の迫り出してくる狭き道
燕の子ドレミファソラシ歌が好き
夏蝶やドッジボールの音弾む
ちんぐるまぽつぽつぽつと雨の音
穏やかな母の遺影や蝉時雨

浴衣

山本　春英

少女より娘となりし浴衣かな
約束の浴衣の子等と夏祭
校門につづく路なり蝉しぐれ
転勤の主見送る百日紅
丹精の自慢話や女王花

## 唐招提寺

山岡　扶佐

隙間なく幹を陣取り蝉しぐれ
一斉に翔び立つ蝉に首すくめ
古都の朝蓮開く音葉陰より
目をこらし蝉の気配を探す朝
蝉しぐれ八一の歌碑は茶屋の前

向日葵

井上　元良

大輪の向日葵ひとつ燦々と
向日葵に希望と勇気あふれけり
夕立に向日葵金の雫垂れ
向日葵や種も熟れ初む昼下り
洗いたる硯入魂筆進む

蝉取り

辻川　松月

抱きかかえ蝉取りさせる父となる
おだやかな一日暮るゝ岐阜提灯
鐘一つ撞いてお盆の終わりけり
我が影の老いしと思う秋暑し
青空に実を膨らませ百日紅

## 暑気払い

久保　春玉

すぐに来る俳句締切蝉時雨
ひまわりの黄が眼底にありし夏
音もなく廻りつづける扇風機
カレー飯でも作ろうか暑気ばらい
ちらと見し女美人の夏日傘

# 玄遠俳句

平成27年 10月号

## 九月来る　早村　春鶴

宿題をまだ終へぬ児に九月来る
壊れゆく猪垣日毎多くなり
休耕の田の主芒穂（すすき）の赤き
秋草の野にある風情我が家にも
空碧く雲高々と九月来る

## 遠花火　小島　小汀

ベランダの特等席や遠花火
遠花火夜空のなんと広きこと
目の高さきまりわが家の遠花火
大輪の花火の消えて眼裏に
花火の夜高ぶる心いつまでも

## 八　月　一谷　春窓

黙祷にひとしほ蝉の声高し
もろこしをかじりつ戦後語りをり
稲雀一羽が立てば群を成す
咲くほどに色放ちて古代蓮
空近き花野へ子等を放ちけり

## 水引草　東　素子

秋海棠（しゅうかいとう）うす紅ほろり坂の上
紅と銀水引草は風の道
虫や鳴く盛りを競う雨の中
あとさきに舞い寄る秋の黒揚羽
素十忌を前に神野寺尋ねたき

## 夏　武部　春浦

夏山の空駈け巡るハイウェイ
乱れ飛ぶ雨の上がりし赤トンボ
万物や一切衆生蝉時雨
歌声に蜩混じる宵まつり
夏祭り今年も雨の抽選会

## 夏　白原　博泉

小さき虫つまみ出したり暮の夏
雨を聴くひと日となりて秋を待つ
いっせいに雀飛び立ち夏惜しむ
淀川に夕日隈なく時計草
父母のなきふるさと赤きダリアかな

## 夏から秋へ　山本　春英

大雷雨夏の終わりを告げてをり
涼しくて淋しくもあり母無き子
大いびき小いびき秋の父と子と
マンションの争いしばし夜長聞く
何時の間に傘壽のいのち夕月夜

## コスモス　久保　春玉

秋刀魚一匹煙籠りて家の中
気がかりが一つ増えたり芒かな
コスモスの倒れ倒れて風強し
秋桜永久の眠りに伯母の顔
今日も又同じくりごと敬老日

## 初　秋　山岡　扶佐

朝顔の種の太きをもらいけり
朝顔の種探しゐる小さき手
ゴロゴロと木の実ころがし子ら遊ぶ
湯治場に秋蝶遊ぶ坂のあり
くつろいで秋の有馬を楽しみて

## 落　鮎　井上　元良

落鮎の素早くくぐる流し網
流し網かかる落鮎人だかり
落鮎の香とぬめり塩まぶす
落鮎の腹に詰まりし卵かな
追ふ夢に練習重ぬる筆の秋

# 玄遠俳句

平成27年 11月号

## 秋郊

早村　春鶴

秋郊の景となりたる嵐山
裏山も秋粧ひて下り来る
林道の地道となりて秋の山
里道は車も跡絶へ秋の暮
書仲間の書論拝聴温め酒

## 秋

小島　小汀

仲秋の月光浴びていて独り
生垣の閉ざされしところ萩白し
雲払い、とっぷり昏れし大月夜
橋渡り秋風の頬なでていく
電線のさゆれ小燕空にあり

## 卒寿翁

東　素子

深まりを抱き秋色肌に受く
朝夕の秋冷背すじ伸ばしけれ
人の歩の速き夕暮桔梗買う
秋の夜や祝木遣(いわいきやり)に卒寿翁
半纏(はんてん)に秋日まつわる鳶頭

## 秋の空

武部　春浦

髪染めて晴々歩く秋の空
開けし戸にパタリと落ちてヤモリかな
秋灯や丸いテントと自転車と
枯葉舞い転がる中に蝶の翅

## コスモス

白原　博泉

コスモスや林泉(しま)の光りて美術館
楽焼きの奥の深さを萩すすき
赤とんぼ運動場にひとしきり
父の忌に弾けて白き桔梗かな
朝顔や知らぬ道行く我ひとり

## 発表会

山本　春英

さわやかにピアノ流れし発表会
街角にふるびしのぼり「秋まつり」
老人と愛犬(いぬ)とベンチや秋夕べ
呼びよせて父子団らん月今宵
秋燈や花束胸に発表会

## 露草

久保　春玉

渡り来る時雨の風かねこじゃらし
露草や空の青さを集めたり
ドングリの重たくもなし神の庭
香の流れ来るは寺院の金木犀
あぜ道の沿ふて山田の彼岸花

## 月の夜

山岡　扶佐

天高く宇宙の深さ今日の月
十六夜の月中天に攝河泉
スーパームーン天地を貫く光なり
空蝉の落葉つかみて風の中
常槃木に朱の太鼓橋神の庭

## 芸の秋

井上　元良

シテとワキ皷の間合能の秋
新世界聴きてうきうき楽の秋
組体操心団結技の秋
黒々と文字の迫力筆の秋
紙の白墨の濃淡芸の秋

# 玄遠俳句

平成27年 12月号

## 神の留守　早村　春鶴

入念に神棚掃除神の留守
願ひごと絵馬に託すや神の留守
冬立つや今日健康の心して
落人の里は霧中径の消へ
落葉径無言の二人音を愛(め)で

## 針の糸　一谷　春窓

図書館の色良き絵本冬うらら
黒猫のまなこ鋭し冬日影
根深汁(ねぶかじる)ひとりの夕飯短くて
襟付けの揃はぬ縫い目冬灯(ふゆともし)
咳の子の通してくれし針の糸

## 初の冬　東　素子

揺れ続くこの国ありて今朝の冬
冬立ちて露地にたわむる雀二羽
雨を呼ぶ立冬の雲おも重し
蕾抱き実を解き放つ椿かな
見上ぐれば色を重ねし晩生(おくて)柿

## 秋の水　武部　春浦

風景の賑わいありて秋祭り
川底の石の白さや秋の水
安堵して見舞い帰りの秋の市
足裏に秋の日射しを集めけり
シーソーに乗るが如くに浮寝鳥(うきねどり)

## 鶏頭　白原　博泉

父の忌や狭庭(さにわ)鶏頭の昼下り
里山に煙たなびく柿落葉
団栗(どんぐり)を拾い集めて留まらず
沼の秋静寂破り鷺翔てる
ふわふわと暮れゆく山の薄(すすき)かな

## 秋深し　山本　春英

いのちある草の実赤く光りゐる
小まわりの利く渡り鳥どこへ行く
盆栽の小さきも黄葉(もみじ)急ぎをり
急ぎゆく我に野菊のそっと揺れ
行楽の老人多き車中かな

## おでん　久保　春玉

思いきり母の物捨ておでん煮る
街中を犬が服着て朝寒し
冬の雨硯洗うて俳句書く
あの人と行ってみたいな紅葉寺
紅葉して落ち葉となっていく寺苑

## 秋の味覚　井上　元良

重たきをさがし求むや路地南瓜
甘藷(かんしょ)飯藷(いも)多きほど匂ひ満つ
甘海老の活造りはね秋味覚
秋鯖を豪華丸焼き匂ひ立つ
駅弁は藷蛸南瓜色取りて

## 小春日　山岡　扶佐

猫寄って陽だまり静かそぞろ寒
小春日や宇宙へ消えし飛行雲
国産のジェット機飛翔秋高し
七五三紅葉トンネル抜けてゆく
境内に晴れ着がはねる七五三